

令和 6 年 4 月 30 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00600

研究課題名(和文) 東濃西部方言の韻律特性に関する研究

研究課題名(英文) A study of the prosodic properties of the western Tono dialect

研究代表者

安藤 智子 (Ando, Tomoko)

富山大学・学術研究部人文科学系・教授

研究者番号：00345547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東日本方言と西日本方言の混じりあう東濃(岐阜県美濃地方東部)西部の方言の位置づけを明確にする試みとして行われたものである。その成果として、談話音声資料の分析により、(1)文初頭におけるリズムとイントネーションの特性、(2)「ン」「ー」といった特殊拍がアクセントの下がり目になる条件を明らかにした。さらに、オンラインアンケートに基づき、(3)接続助詞「ニ」の原因・理由を表す順接用法、(4)特定のイントネーションを伴う終助詞「ヨ」の「勧め」としての用法の現状を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インターネットを含むマスメディアの隆盛や交通機関の至便化に伴い、現代の日本では各地の方言が共通語化の波にさらされ、変容し、衰退しつつあるが、このことは、言語および言語に支えられる文化の多様性の衰退につながるものであり、地域方言の記録は急務の課題である。本研究は、言語的特徴を話者自身が自覚しにくい東濃方言を取り上げるものであり、社会的意義としては、方言の記録・保存を行うとともに、市民の言語意識の醸成に寄与する。また、言語研究における学術的意義としては、方言区画の境界に位置する一小方言のデータを提供することにより、方言の動態に関するデータの蓄積および記述・分析に寄与するものである。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted as an attempt to clarify the position of dialects in the western part of Tono (eastern part of the Mino region, Gifu Prefecture), where eastern and western Japanese dialects are intermingled. The results of this study are as follows: (1) the characteristics of rhythm and intonation at the beginning of sentences, and (2) the conditions under which the pitch falls just after syllable final nasals and long vowels. Furthermore, based on an online questionnaire, we clarified (3) the current status of the conjunctive particle "ni" as a cause/reason adjunct and (4) the use of the final particle "yo" with specific intonation as a "recommendation".

研究分野：言語学

キーワード：東濃方言 プロソディ 接続助詞 終助詞

1. 研究開始当初の背景

岐阜県南東部に当たる東濃地方は、岐阜市方面(西濃地方)よりも交通の便や陶磁器産業の関係で名古屋市や瀬戸市など愛知県との関わりが強く、特にその玄関口である多治見市はその傾向が強い。このため、東濃のなかでも特に多治見市などの西部はことばのうえでも、若年層を中心に共通語化が進んでいる名古屋市等尾張方面の影響を受けやすい位置にあると言える。実際に、1970年代に記録された方言語彙の半数程度が、多治見市の古くからの地域の高齢層にも用いられなくなっている。さらに近年は名古屋市等に通勤・通学可能なことからベッドタウン化が進み、新しく開発された住宅地には当該の方言を話さない住民が増えつつあるとみられる。このような状況において、東濃の言語使用には大きな年代差・地域差が見られ、非常にバリエーションの豊かな状態が観察されるが、この状態が長く続くとは考えられず、一刻も早い総合的記述が望まれる。報告者による東濃方言の調査はこのような状況において2012年に開始された。

日本語諸方言のアクセントに関する研究は、これまでに言語地理学的調査から通時的考察まで様々な試みが展開され、豊富な成果を得ているが、地域の変種の中には詳細な記述が行われていないものも少なくない。本土方言で東西対立を示す多くの項目の境界線が通る岐阜県の方のうち、アクセントに関しては、その東西の境界線上重要な西濃地方を中心とした方言の記述は豊富であるが、語形では西の特徴を示しながらアクセントは東の特徴の強い東濃西部(多治見市・土岐市・瑞浪市)方言の研究は非常に少なく、東京式アクセントの中でも内輪式とも中輪式ともとれる記述があるなど整理されていなかった。

このため、報告者はH25～H27年度の研究(基盤研究(C)課題番号25370427)で高齢層の語アクセントの体系的な記述を行うとともに、動詞の活用形を含めた文節のアクセントの観察を行ってきた。その結果、1拍2類名詞に関しては、多治見市をほぼ東西に貫いて流れる土岐川の右岸と左岸で内輪式と中輪式に区分されることが明らかになった。また、当該方言の動詞においては内輪式の傾向が強く見られるが、パラダイムの均一性や多数派の型への類推といった観点で説明可能な変化が起きていることを明らかにした。

続いてH28～H30(基盤研究(C)課題番号16K02622)では、まず、形容詞のアクセントの分析をおこない、多治見方言の語アクセントの音韻論的記述の総括をおこなった。さらに、談話データの収集と音響分析をおこない、文の初頭におけるリズムとイントネーションに見られるこの方言の特徴を報告した。

本研究期間の開始時には、東西方言の境界にある東濃西部方言について、音声面で以上述べたように韻律面を中心とした研究の基礎が固められつつあった。

2. 研究の目的

本研究は、東日本方言と西日本方言の混じりあう東濃方言の位置づけを明確にする試みであり、特に、前の研究費助成期間に引き続き、当該方言の自然な発話におけるリズム、イントネーションといった音声的特徴を明らかにすることを目的として研究を開始した。この段階ですでに、文初頭のリズムやイントネーションの特徴をある程度把握することができていたことから、その分析の精緻化を進めるとともに、話者の年齢層や地理的な影響など社会言語学的な観点で新たな音声資料を収集し、文の初頭以外の部分の分析を進める予定であった。

しかし、COVID-19の蔓延によりフィールドワークによる音声資料の収集を断念し、予定していた調査の断念を余儀なくされたことから、新たな調査方法を模索した。その中で、当初の目的をふまえつつも、節末尾のイントネーションと関わる接続助詞や終助詞の機能について、これまでの先行研究において記述が及んでいない事項の記述を行うことを、新たな目的として加えた。

3. 研究の方法

本研究は、東濃方言の自然な発話におけるリズム、イントネーションといった音声的特徴を社会言語学的なフィールドワークにより明らかにすることを企図して研究を開始したが、COVID-19の蔓延により、対面での発話を伴う方言調査が困難な時期があったことから、当初の計画を変更し、入手済みの音声資料の分析を精緻化するとともに、文法的な問題を射程に入れた研究をおこなうこととなった。

研究期間前半には、COVID-19蔓延以前に収集した談話音声資料の音響分析を進め、文の初頭のリズムとイントネーションに見られる当該方言の特徴とその出現条件を数量的に分析し、学会発表および論文として結果を公表した。

次に、調査文読み上げ式調査および談話調査によって得られた音声資料に出現する動詞の分析をもとに、当該方言において特殊拍がアクセント核をもちうる条件を形態論の面から整理し、1本の論文を著した。

研究期間後半には、コロナ禍に対応して、オンラインアンケートを文法研究に取り入れた。まず、特定の音調の接続助詞「ニ」について、原因・理由を表す順接用法が一定の条件で許容される状況を把握した。さらに最終年度において、合成音声を組み込んだオンラインアンケートを用いて、終助詞「ヨ」が特定のイントネーションを伴う場合に限って「勧め」の意味で理解される

ことを明らかにし、複数の論文や協力者へのパンフレット配布において発表した。

4. 研究成果

助成期間初年度の2019年度には、多治見市の高齢層の談話音声資料から、主に2つの点が明らかになった。

(1-1) 文や節の初頭の拍が、節内部の拍に比べて条件により平均で32~40%長くなる独特のリズムが現れる。

(1-2) アクセントの下降位置が文頭2拍目までにない場合、文頭のイントネーションの上昇が共通語に比べて遅れ、イントネーションが高く平らになる時間が短い傾向がある。

これらの特徴は、共通語や東京方言において疑念などの感情を込めた発話にも見られることが先行研究において明らかにされているが、東濃西部方言では感情的な発話だけでなく通常の冷静な発話においても現れるという点が独特である。この研究成果は、関西言語学会において発表され、さらに論文が学会誌 KLS Selected Papers 2 に掲載された。

2020年度には、調査文読み上げ式の音声資料および談話音声資料に基づいて、動詞の活用形において特殊拍がアクセント核となる条件を分析し、1本の論文にまとめた。この研究では、次のことが明らかになった。

(2-1) 無核のカ・ガ・サ行五段動詞の連用形においてイ音便が長母音化した引き音(例: サー' タ「咲いた」) および無核のワ行五段動詞の連用形語尾が長母音化した引き音(例: カー' ニ「買いに」) は、アクセント核を持つことがあり、アクセント核に他の位置とのゆれが見られる。

(2-2) 無核の動詞に後続する否定辞「ン」の撥音は基本的にアクセント核を持つ(例: イケン' ワ「行けないよ」)。

2021~2022年度には、オンラインアンケートを行い、低接無音調の接続助詞「ニ」の原因・理由を表す順接用法が一定の条件で許容される状況を明らかにし、1本の論文にまとめた。この研究では、次のことが明らかになった。

(3-1) 原因・理由を表す接続助詞としては「デ」が優勢であるが、当該地域では接続助詞「ニ」が高齢層を中心に話者によって使用される。

(3-2) 接続助詞「ニ」が原因・理由を示すものとして許容されるのは、主節が働きかけのモダリティを持ち、従属節がその根拠を述べる場合に限られる(例: アシタ ハヤイニ ハヨ ネヤー「あしたは早いから、早く寝なさい」) が、その働きかけの根拠となる従属節の内容を聞き手が把握していると話し手が認識している場合に容認度が高い。

(3-3) 聞き手が従属節の内容を把握していない場合でも、聞き手の健康などの利益のために話し手が強く認識を要請する場合(例: ソノ タマゴ フルイニ タベヤースナ「その卵は古いから、食べるのはよしなさい」) には、容認度が上昇する。

2022年度から最終年度となる2023年度にかけては、終助詞「ヨ」について文献調査を網羅的におこなった後、東濃全域 151名を対象として合成音声を組み込んだオンラインアンケートを実施した。その際、「ヨ」に3種のイントネーションを掛けた合成音声を下図に示す。

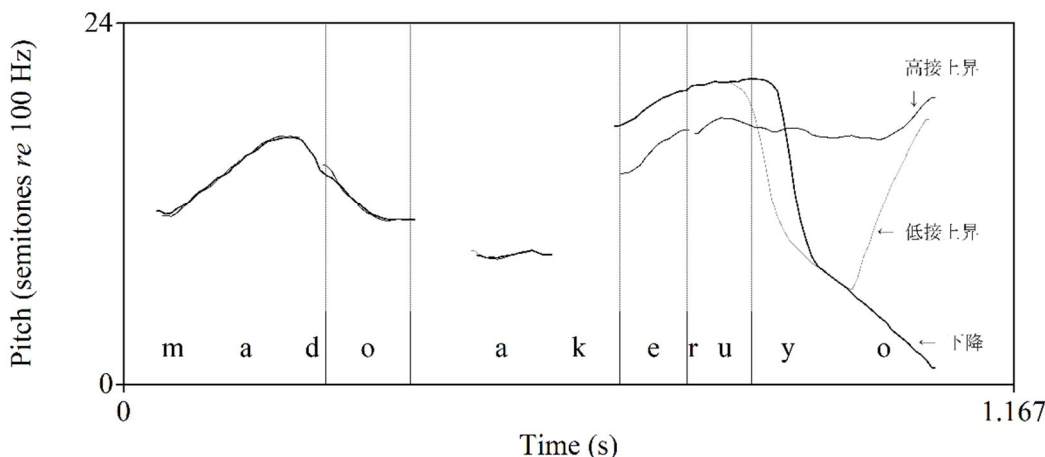


図 「マド アケル-ヨ」(窓、開けるよ)の3つの音調

この研究により、明らかになった主要な点は次のとおりである。

(4-1) 下降調のイントネーションを伴う場合に限って「勧め」の意味で解釈されうる(回答者全体で71.5%)が、聞き手により解釈にゆれがある。

(4-2) 多治見市の出身者では下降調の「ヨ」が「勧め」の意味に解釈される率が特に高い(多治見市84.3%、土岐市67.9%、瑞浪市37.5%)。

(4-3) 他の方言文法的特徴をもつ表現を使用する人において、「勧め」の意味に解釈する率が高い(形容詞仮定形ケヤを使用する人で81.8%)。

(4-4) 同じく「勧め」の意味を持つ下降調の「~タラワ」と比べると、「ヨ」の方が当為的に解

積される傾向がある。

このテーマに関連する2本の論文、1件の講演、協力者へのパンフレット配布において、終助詞「ヨ」が「勧め」のモダリティを表すという、諸方言に関する先行研究において指摘されてこなかった事実を報告した。

これらの研究活動と並行して、市民に研究成果を還元するため、方言カルタの発行と当該方言に関するホームページの運営をおこなった。方言カルタは4社の新聞に取り上げられ、高齢層に親しまれたほか、一部の小学校において教育に取り入れられ、ゲーム感覚で郷土に親しむ活動や開校150周年記念行事に活用された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 安藤智子	4. 巻 77
2. 論文標題 東濃方言における順接の接続助詞「ニ」の使用傾向に関する検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 富山大学人文科学研究	6. 最初と最後の頁 133-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 安藤智子	4. 巻 74
2. 論文標題 多治見方言における動詞のアクセント（2）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 43-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 安藤智子	4. 巻 2
2. 論文標題 東濃西部方言の節初頭におけるプロソディの特徴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 177-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安藤智子	4. 巻 79
2. 論文標題 東濃方言における終助詞「ヨ」の機能と音調に関する予備的考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 富山大学人文科学研究	6. 最初と最後の頁 69-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安藤智子	4. 巻 VII
2. 論文標題 気づかない方言文末詞に気づくとき	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 富山大学人文学部叢書 人文知のカレイドスコープ	6. 最初と最後の頁 34-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 安藤智子
2. 発表標題 東濃西部方言の遅上がりと拍の延伸について
3. 学会等名 関西言語学会 (KLS44) (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>HP作成・管理: 「多治見弁の部屋」(2014年~) http://tajimi-ben.jp/ ブログ執筆: 「多治見弁blog」(2014年~) http://blog.livedoor.jp/tajimiben/ 方言カルタ: 「たじみべんかるた」科研費にてCD付で制作(2019年)し自治体に寄贈後、株式会社東文堂本店(2020年)から発売 講演1: 「たじみべんのはなし」(2022年11月15日、多治見市立養正小学校150周年記念事業) 講演2: 「気づかない方言文末詞に気づくとき」(2023年6月28日、富山大学人文学部富山循環型「人文知」研究プロジェクト公開研究交流会 第34回「人文知」コレギウム) (以上、すべて報告者単著・単独)</p>

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------